



公害の除去と産業の育成

——「ポリニート・スコープ」
を読んで

経済局 本間昭夫

本市において産業公害に対する防波堤の役割をされ、公害対策行政の要であった公害研究所長の助川氏が本市を退職するにあたり「ポリニート・スコープ」(公害を診る眼)という随筆集を出版された。

これは、公害というとても怪物に対して、常に一般市民や弱者の立場に立って戦ってきた助川氏のおりおりの心にくれた事柄を随筆、短歌等によつてまとめたものであるが、本市公害対策行政の記録としても一見の価値がある。
わが国は戦後、長い間高度経

済成長を続けてきたが、それに伴う都市化、工業化の波は、一方において都市公害、産業公害の問題を生み出した。

本市でも例外ではなく、人口流入による過密は、都市のスプレッド・住商工の混在立地等の原因となっており、工業化の波と相まって産業公害に關し、企業と一般住民との間で深刻な問題となっている。

だからといって生活基盤の確立、活気のある町づくりをめざす本市の構想からして産業の育成、振興を放棄してよいものではない。これからは、公害の除去・産業の育成という相反することを併行して達成しなければならぬが、具体的な行政施策として次の三点を提案する。

- (一)都市計画画から、土地利用計画を見直し、用途純化を図る。
- (二)公害対策画から、公害防止技術の革新を図るとともに、企業個々の特性に合った公害防止計画を策定し指導する。
- (三)経済画から、大都市に適合する低公害、省資源、高付加価値型産業への業種転換を図るとともにそれら都市型産業を育成する。

私が携っている金沢地先理立への工場等の移転事業は、これらの取組みの第一歩であり、市内部はもちろん市民、企業の協力を得て成功させねばならないが、経済不況下における移転資金確保の問題等前途は決して樂觀できないのが現状である。

無公害への道のりは遠いが、私たち一人一人が「ポリニート・スコープ」を持って現状を一步づつでも前進させねばならないと考えている。

書かれたものの一人歩き

教育委員会事務局 木下大輔

活字によって書かれたものは事象を具体的に、または抽象的に著し、人々を納得させる効果をもつ。そして、私たちが物事を共有する利便性を有する。しかし、書かれたものすべてを理解すると考える人間の自己過信のためか、物事の移り変わりを實際に悟ることなく、机上ですべてを理解してしまふ錯覚に陥る。額に汗して物事を解釈するのを忘れ、簡単に思索して一人合点をする。

例えば、私たち公務員は、書かれたものがすべてであるという傲慢さはもっていいまいか。私も、その誘惑に負けてしまふ一人かもしれない。人は安易に流れ、足でかせいだ材料か、組織を回した資料により書かれたか、余り気にとめない。蝸壺の資料に満足している人に不安を覚える。少なくとも、住民と共に歩む公務にたずさわる私たちは、蝸壺から一步でもはいあがりた。書かれた物の限界をわかる感受性を備えたいものである。

今こそ、「百聞は一見にしかず」一見して万事が解るとは限らないが、一見する人々には、一人一人の感受性を得るであろうから、各々の広がりがある。広がりのあるところに、未来に輝く創造が開かれるのではない

へあとがき

都市化が進む中で、コミュニティ醸成の場としての地域施設のあり方、管理運営主体等について、諸々の論議が起きている。本市においてもその管理運営形態はさまざまであり、内包する

か。汗を流して歩こう。汗を流して歩いて書かれた活字こそ生きてくる。すなわち、本当に生きた活字を私たちの共有財としてしよう。

書かれた物の一人歩きを許さない感受性を身に付ける努力を重ねよう。感受性を失った文字は、単なる人間の失われた活字に惰してしまふ。書かれ物を「活字」にするために、感受性の解る心を失いたくないものだ。

『調査季報』は職員が自由に意見を發表し討論する行政研究誌です。「行政研究」への投稿も歓迎します。二〇〇字詰五〇枚以内。
この「読者のページ」へもご投稿ください。市政、都市問題、自治体問題等、題材は自由。七〇〇字以内。

問題もさまざまである。本特集では、それらの問題点を浮き彫りにし、望ましい管理運営方法を探ることを趣旨としたが、十分には掘り下げられなかった点も多い。今後の方策検討の契機となれば幸いである。〈小林〉